

第1回

# 現代の子ども像と学校存在の意義、そして、支援の基本方策

研修動画はこちらのQRコードからどうぞ



\*本稿の映像や資料は読者のソロ研修をサポートするためのものです。他の目的での使用や再配布等は固く禁じます。  
 \*この動画では「甘茶の音楽工房」の「2つのヴァイオリン」という曲を使わせていただいております。  
 \*この動画の視聴可能期間は2024年3月末日までとなります。

大勢で学ぶのも楽しい。そして、「独り (Solo)」で学ぶのもきって楽しい。「学び」は楽しいもの!



名城大学教授  
**曾山 和彦**

そやま かずひこ 私は今、先生方と一緒に子どもの「かかわりの力」を育み、笑顔溢れる学校を創ることに力を入れています。「周りに要求することは、すべて自分がしてみせる」をモットーに!

公立学校教員であった私の「財産」は、多くの学級の担任を経験したこと。振り返れば、うまくいった、いかなかった学級づくりのすべてが、私をほつりと温かな気持ちにさせてくれます。私は今、大学教員として、その「財産」を教育カウンセリング理論・技法によって整理しています。

令和元年一二月以降、コロナ禍によりさまざまな対面研修の機会を奪われたことは残念なことでした。一方で、オンライン研修の機会を多く得たことは、新たな学び方への出会いになったとも言えます。

私はZoom等のツールを使い、「独り」「オンデマンド(オンIIそのつど。デマンドII要求)」スタイルで学会に参加したり、著名な先生のご講演を拝聴したりするうち、「オンライン研修はこれほど楽しく、役立つものだったのか」と、目から鱗が落ちるような感覚を覚えました。

本連載は、私が感じたオンライン研修の魅力を、「今度は私が多くの方に届けた」という想いから生まれたものです。全一二回、私の考えを「30分動画」(QRコード)&「文章」のハイブリッド・スタイルにて紹介します。

大勢で集まって学ぶのはもちろん楽しいですが、独り(Solo)で学ぶこともきつと楽しくなります。私がお伝えすることの中から、自分にとって必要と感じるものを選び取り、幸せな学級づくりに活かしていただけるならば幸いです。

連載のスタートは、これまで多くの子どもたちに触れ、私が今、一番思うことをあらためて整理します。

## 現代の子ども像と「かわりの力」



私の出身は群馬県桐生市です。かつて「西の西陣、東の桐生」と謳われた機織り文化の街・桐生は、太平洋戦争の空襲被害を免れたこともあり、街の中心部であっても狭い道が多く、昔ながらの小さな家がひしめくように立ち並んでいた…。私の記憶にはそのような街の風景が刻まれています。

また、私には祖母がいましたので「家の中には大人が三人」という家庭環境でした。それに、玄関を開ければ、すぐ目の前がよその家という長屋であり、「近所の大人皆が私を知っていた」という住環境でした。私はこのような環境の中、幼少期を過ごしたことになります。

今から五〇年以上遡る昭和三〇年代は、桐生に限らず、日本各地が似たような「子どもを囲む」環境にあったのではないかと思います。

「子どもは大人から愛されれば愛されるほど非行から遠ざかる」…夜回り先生こ

と水谷修先生のご講演を拝聴した際にメモをとったこの言葉が、今、あらためて私の胸にストンと落ちます。

私は、両親、祖母、地域の方々に、たくさん「愛された」(＝ほめられ、叱られ、言葉をかけられた)からこそ、元気に子ども時代を過ごし、大人に成長できたのだと、あらためて感謝の気持ちが湧いてきます。

昭和から平成を経て、令和の時代を迎えた今、「子どもを囲む」家庭・地域環境は以前とは大きく様変わりしました。厚生労働省の調査などで明らかになっている「核家族」「一人親」世帯の増加、また、「隣に住んでいる人のことは知らない」等、地域の人的交流機会の減少など、子どもにかかわる大人が量的に減ったことは確かであると考えられます。

つまり、現代の子どもたちは、以前に比べれば「人とのかわり体験が不足している」…私はこのようにとらえています(もちろん、家庭・地域によっては、私が子どもだった頃同様、大勢の大人が「子どもを囲む」環境が整っているでしょ

うが…)。

十分なかかわり体験がなければ、子どもたちが「かわりの力」を身につけることは難しいでしょう。

「かわりの力」を構成する要素として、私の研究過程で明らかになったのは「自尊感情」と「ソーシャルスキル」の二つです。いずれも、かわりを通さなければ育むことは難しいものであり、これらの低さ・乏しさが、学校不適応(不登校・いじめ)、通常学級に在籍する「気になる子」の問題につながっていると、私はとらえています。

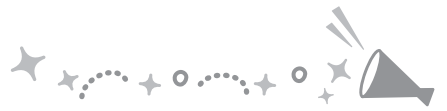
## 学校は「人を人にする最後の砦」



自尊感情とは、「自己評価の感情」であると考えます。自分に程よく「OK」と言える「心のありよう」です(「自己肯定感」とほぼ同義)。

ソーシャルスキルとは、「対人関係の技術・コツ」と言えます。

この自尊感情が低い場合と、ソーシャルスキルが乏しい場合を具体的に挙げて



みましよう。

〈低い自尊心〉自信のなさを生み、学校から消える(↓不登校)。自分に「OK」と言えなければ、周りにはなおさら「OK」と言えない。だから友達にひどいことを言う。「うざい」「消えろ」等(↓いじめ)。

〈乏しいソーシャルスキル〉かわりが苦手と自己認知する(↓不登校)。悪気がなくても口に「暴言」が馴染んでいるので、友達にひどいことを言ってしまう(↓いじめ)。

自尊心とソーシャルスキルが十分に育っていない子どもは、「気になる子」にちよっかいを出す(「油を注ぐ」)ので、「気になる子」の火が大きくなってしまいます。

私は、学校不適応・「気になる子」問題がいつまでも悩ましいのは、子どもたちの「人とかかわり体験不足」による「かわりの力」の弱さにあるととらえています。

子どもたち自身に責任があるのではなく、「子どもを囲む」環境があまりにも変わりすぎたということです。「人が人になるには人が必要」：その意味で、家庭・地域は子どもを人にする力が弱まったと言わざるを得ません。

しかし、学校・学級はどうでしょうか。必然的に集団が構成される環境は以前と変わりません。

あえて強めに言うならば、「人を人にする最後の砦」が学校・学級であり、その砦を守る任務を与えられた者が、私たち教師であると言えるのではないのでしょうか。

そして、子どもたちにかかわりの力を育み、人として育て上げることに、現代の学校の存在意義があるのではないかと、今、襟を正している私です。

### 現代の子どもを育む基本方策



現代の子どもを育む基本方策は、「かわりを通して『かわりの力』を育成する」という一言です。そして、「かわり

の力」の具体要素である「自尊心&ソーシャルスキル」は、日々の学級づくりを通して、育成することが可能です。

学級づくりとは、学級経営、すなわち「学習指導・生徒指導の両面にわたってその教育機能を十分に発揮できるように、学級における様々な条件整備を行うこと」(吉田・大森、一九九九)の核であり、言葉を変えれば「居場所づくり」ともなりま

す。各地の学級を参観すると「すべての子が溶け込んでいると感じる学級」に出会うことがあります。私は、そうした学級を「綺麗な機が織り上がっている」と表現することがあります。教師と子どもの関係(縦糸)と子ども同士の関係(横糸)が良好な様子をたどえたものです。

学級が「居場所」になる、あるいは綺麗な機が織り上がるには、皆さんは何が大切だと思いますか。

私は体験的、かつ先行研究の知見(河村、二〇〇七)をもとに、「ルール」と「ふれあい」の二つが不可欠ととらえています。

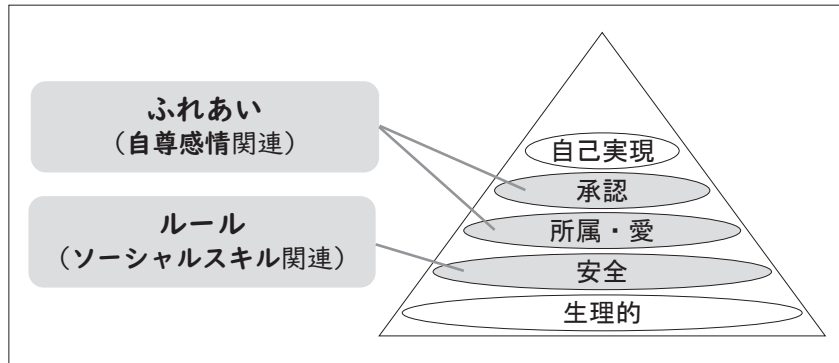
この二条件の大切さは、マズローの欲

求階層説によって裏づけられると考えます。マズローは人間の欲求を五層に分類し、低位欲求が部分的にでも満たされない限り、上位欲求は生じ得ないと唱えました。図に示したように、生理的欲求(飲みたい、食べたい等)↓安全欲求(安心・安全で過ごしたい等)↓所属・愛欲求(所属したい、愛されたい等)↓承認欲求(認められたい等)↓自己実現欲求(夢を實現したい等)の五層です。

登校している子どもたちであれば、第一層の生理的欲求は満たされていると考え、第二層の安全欲求に込めることが教師の大切な仕事になります。それは「ルールづくり」であり、主にソーシャルスキル育成に関連すると思われまます。だからこそ、私たち教師は学級内のルールを徹底することが何よりも大切なことと言えます。

第三・四層は、承認欲求として一つにまとめてよいのではないかと、個人的には考えています。「先生や友達に認めてもらいたい」という子どもたちの思いに込めることも、教師の大切な仕事です。そ

図 マズローの欲求階層説が「居場所」の理論ベース



れは「ふれあいづくり」であり、主に自尊感情育成に関連すると思われまます。だからこそ、教師はたっぷりと子どもに声をかけたり、ペア活動・グループ活動等の機会を用意したりすることが大切にな

ります。

いかがでしょうか。マズローの欲求階層説の理論を学ぶことで、日頃の実践に対する背中の一押しをもらったように感じませんか。

「Thinkの前には理論が必要」と恩師・國分康孝先生に学んだ言葉を皆さんにもお伝えします。

実践に自信を持つためにも、さまざまな理論を学んでいきましょう。「ルール」と「ふれあい」という二本柱がしっかりと立つ学級をつくることができれば、「学習指導」「生徒指導」「特別支援教育」等をスムーズに行うことができる…これが私の考えの「現在地」です。

次回以降、「かわりの力」育成、学級づくりの具体方策を皆さんにお伝えします。来月また、本誌面と「30分動画」にてお会いしましょう。

〈参考・引用文献〉

河村茂雄(二〇〇七)『データが語る① 学校の課題』図書文化社

吉田辰雄・大森正編著(一九九九)『教職入門 教師への道』図書文化社

師への道』図書文化社